

炭坑の街カラガンダ

京都府 八木 敏 雄

昭和十七年一月七日、現役兵として広島電信第二連隊に入隊する。

昭和十九年春、奉天（現瀋陽）の関東軍通信教育隊橋本隊に転属した。初年兵教育をやりながら中隊の事務室勤務をする。三カ月の速成教育を三回ほど務めた。

昭和二十年八月十五日朝、いつもと同じように中隊事務室にて事務をしていたとき、ラジオで「正午に重大ニュースを発表します」と報道された。正午になるのを待ってラジオを聞いていた。「日本国は全面降伏した」と発表があり、そのあと天皇陛下が泣いたような声で「終戦の詔書」を読まれた。事務室にいた全員が思いもよらぬ出来事に度胆を抜かれたように一瞬黙り込んでしまった。その月の末頃、ソ連兵が進駐して

来て兵器を全部取り上げてしまった。それから九月末頃まで何もすることがなかった。

ある日「日本へ帰すから身のまわりのものを始末せよ」との命令が下った。その後奉天駅にて列車に乗せられ、三、四日かかって黒河に着いた。「これからアムール河を渡ってシベリア鉄道でウラジオストクへ行き、日本へ帰す」と説明された。それから全員、メリケン粉の十キログラム入り袋を持たされ船着場まで運ばされた。空腹と過労で死ぬ思いであった。夜になつて荷物を船へ積み込む作業をさせられた。様子のわからない暗闇で、甲板の上から船倉まで落ちて一人犠牲になったと聞いた。船積みが終わわり、河岸の幕舎で一夜を明かす。翌日アムール河を渡りソ連領に入った。あとで判ったのだが、ここがブラゴエシチェンスクであった。

十月一日であったと思う、貨車一台に四十人余り乗せられ、出発した。一晚中貨車は走り続けて夜が明けて外を見ると、日本と反対の方向へ走っていた。まふまふと騙されたことに気づいたが万事休すだ。もうこう

なったらいつ帰れるか判らないと皆がガックリとなったものである。長い間入浴もせず、顔を洗うことも出
来ず、虱と南京虫に悩まされていた。列車はほとんど
西へ向かって走る。途中食事の準備で止まった。チタ
というところだ。出発して何日目だったか覚えていな
いが、全員下りて入浴するという。衣類は入浴してい
る間に熱気消毒で虱を退治してくれた。久しぶりに気
持ち良くなったが、また列車にすし詰めにされて走
る。水や燃料の補給か、時間の調整か、再々止まって
はまた走り出す。自分は栄養失調で食べ物を受け付け
なくなり、半分死んだようなものだった。駅の名前は
覚えていないがソ連人が丸い大きなパンを売りに来た
ので、隠して持っていた万年筆と交換して食べたら
やっと胃袋が受け付けてくれ、命をつなぐことが出来
た。それから何日か走ってノボシビルスク駅に着き、
そこからシベリア鉄道を外れて列車は南へ南へと、二
日間くらいして炭坑の街カラガンダに夕方着いた。十
月二十日だったと覚えている。

さすが大陸の冬は早い。夜になると零下三十度くら

いに下がっていたと思う。收容所の前で雪の上に五時
間くらい座らされてもう駄目だと思った。監視兵の
「ダワイ」に追い立てられてバラックに入る。板張りの
二段ベッド一組で四人寝られるようにしてある。お
がくずの入った薄い敷布団と、掛け布団は毛布一枚で
あった。

翌日から全員作業に出る。收容所へ引く水道の穴掘
り作業だった。自分は身体が弱っていたので休ませて
くれた。一週間ぐらいして炭坑の作業に出ることに
なつて、自分も出られるようになっていた。

それから毎日石炭掘りをドイツ人と一緒にやった。
一昼夜三交代で、一組は午前八時から午後四時まで、
二組は午後四時から十二時まで、三組は午前零時から
八時まで、組替えは一週間毎にやった。自分の仕事は
トロッコを通す坑道掘りで、鳥居を二本組み上げて、
掘った石炭とボタはトロッコに積んで片付けねばなら
なかつた。八時間働き詰めでも予定の作業が完成しな
い時が度々あって、次の組のカマンジールがひどく
怒つた。毎日炭坑まで歩いて一時間半、雪の酷く降る

ときには二時間以上かかり、空腹と疲労で死ぬ思いで歩いた。収容所にいる十二時間足らずの間に三回の食事を摂らねばならないから寝る時間がなく疲れが取れず、その上食事の少ないこと、一食パン一切れのとぎと飯盒一杯のスープのときがあり、食べたそのときから空腹の連続であった。お互いに話し合うことは食べ物の話ばかりである。それにもかかわらず作業はノルマ制で、八時間ではとても出来ないノルマで、一〇〇パーセント出来ないときはその分食事が減らされ余計な能率が上がらず、身体は痩せて皆見る影もない有様であった。

六カ月に一回くらいソ連の女医が来て身体検査が行われた。お尻の肉をつまんで一級・二級・三級、ロシア語ではアジーン、ドヴァー、トリーと呼び、一級は炭坑、二級は農場や地上勤務、三級は入院療養と分けられた。自分は見ると影もなく痩せて骨と皮ばかりとなり、七十日間くらい病院内の掃除ばかりやらされたこともあった。また、あるときは農場の作業に出て、小麦倉庫の作業や、人参の列車積込みとトラックから下

ろす作業には人参を生でかじりながら作業をしたこともあった。作業していても言葉がわからず、ロシア人は腹を立て殴るやらで、地獄のどん底の毎日であった。食事の量が少ないので仕事が出来ないと訴えたあるとき、そんなはずがないということから、上の方ではそこそこ出していたものを共産党の幹部が横流しをして私腹を肥やしていたことが我々の上申で分かって罰せられたと聞いた。

昭和二十二年の冬になって食事も大分良くなって空腹を満たすようになり、給金も少しくれるようになった。ある晩、仕事に疲れて寝ようと思っていたら材木の貨車下ろしに出よとのことで、一台分を下ろし終わったら帰すと言っていたが、もう一台分下ろせと言うので、それでは話が違くと抗議すると「お前等は捕虜だから死ぬまで働け」と言われ、情けないやら口惜しいやら、煮えくり返るほど腹が立ったが仕方なく作業をすませた。そのときは材木はこちこちに凍りついていた。零下三十度くらいは下がっていたと思う。今も共産党とロシア人に対しての憎しみは忘れることが

出来ない。夜空の月を見て、歌の文句じゃないけれど「あれが鏡であったなら日本の故郷が映るのになあ」と涙したことが度々あった。何としても死んではならないと自分で励ました。

ソ連生活も三年目に入って身体はポツポツ元氣を取り戻してきたが、幸いと言うか不幸と言うか、三日ほど作業をしたら熱が出て作業を休むことが出来た。それがだんだん多くなってきた。ロシアでは、いくら具合の悪いところがあっても熱が出なかつたら偽病（ヒートリーバリノイ）ということでは仕事に行きなさいと言う。

昭和二十三年七月末頃「これから名前を呼んだ者は日本へ帰すから準備せよ」と言われ、自分もその一員に加えてくれた。これも先に述べた熱のお蔭である。しかし、これまで度々騙され続けていたので直ぐには喜べなかつた。カラガンダ炭坑を後にして列車は何日も何日も走った。東へ東へと走っているので何となく日本が近づくようだ。やがてナホトカに到着した。汽車の中でも民主教育は盛んであったが、ソ連最後のこ

の地での三日間は、朝から晩まで「共產主義は世界の常識である。資本主義はやがて影を失い、世界の国々が赤旗の下スクラムを組むところに世界の平和と個々の幸福が得られるのである」ということである。

港に信洋丸という引揚船が入って来た。一人一人名前を呼ばれて船に乗っていく。皆何も言わずに黙々と船室に入る。頭の中では「帰れるのだ、帰れるのだ」と繰り返し叫んでいる。船はいつしか出航していた。三日間波穏やかな日本海を航行していた。「日本が見えるぞ！」皆甲板へ上がって近づく島影を眺めて涙を浮かべていた。

九月三日、六年九カ月ぶりに内地の土を踏んだ。たとえようのない嬉しさで胸がドキドキする。大勢の出迎えを受けて船を下り、宿舎へ入った。数日の内によいよ懐かしの故郷、八木町へ帰れるのだ。

短歌『抑留』

終戦の日が近づく^いと涙出す

異国で逝きし戦友をしのびて

毎日をノルマノルマでたゞかかれて
空腹のため倒れし戦友よ

月の夜にあれが鏡であるならば

故郷うつせと思う淋しさ

ボルガの流れ

京都府 八木 篤 司

昭和十七年六月、ミッドウェー海戦で日本空母四隻・全艦載機、搭乗兵など多数を失うという残念なニュースが巷間を流れ、非常時という観念が現実味を帯びて我々の日常生活に重圧となつて響いていた。その年の十一月一日、現役で京都伏見中部第三七部隊へ入隊した。

昭和十八、十九年は津、東京などで幹部教育を受けた。

昭和二十年、ハルビンの関東軍野戦貨物廠に幹部と

して勤務していた。その年の四月、米軍が沖繩本島に上陸、大激戦の攻防がくり返されて、日本主要都市にアメリカの爆撃機の襲来が引きも切らず、八月六日広島に、九日には長崎には新型爆弾が投下され、数十万の死者が出たと新聞ニュースで知り愕然としたものであった。その上、満州東部地区に戦車隊を先頭にいたソ連軍が関東軍国境警備軍を攻撃して満州国内に侵攻しつつあるとの情報も入った。

八月十五日、重大放送があるというので、我々将校も兵らも一室に集まって天皇陛下の玉音を聞いた。日本はアメリカなどの連合軍に無条件降伏したと言う。日の前に敵の姿がないので負けたという実感がわかない。

日本国はどうなるのか？ 我々満州に闘っている軍隊は？ 内地や外地にいる大勢の一般日本人は？ すべて不明のまま、日が経つに従つてソ連軍の侵入が始まった。そしてハルビン市内の治安は悪化して来た。北満国境方面から避難して来た老人や女性、子供の多い日本人の人々、息も絶え絶えの様子で続々と入つて